

きみはいい子（2）

「子どもは親をえらべない。住むところも、通う学校もえらべない（「サンタさんの来ない家」から）。

子ども達は、生まれた環境が全てであり、自分の力ではどうすることもできません。

子ども達は、親に愛されるためにこの世に生を受けたはずなのに、親からの虐待によって、楽しい夢や美しい夢を見ることもなくこの世を去った子ども達の多いことに愕然とします。

子ども達にとって親の存在は絶対であり、親に逆らっては生きていけないことを、子ども達は本能的に知っています。どのような親であっても、子はその親に寄り添って生きるほかありません。

こうした関係の中で、児童虐待が起こっている事は、悲しい現実です。そして、もっと悲劇的なのは、親から虐待を受けた子が親になった時、我が子に対しても同じように虐待してしまう虐待の連鎖という呪縛から逃れられず苦しんでいる親の存在です。

「児童虐待は止めろ」というだけでは、児童虐待はなくなりません。これまで、行政機関をはじめ様々な方々が児童虐待防止を叫んでも、一向に児童虐待がなくなる現実がそのことを良く物語っています。

こうした中、「べっぴんさん」という作品は、問題解決に向けて大事なことを私たちに示しています。

主人公の「私」は「あやね」という女の子の母親。公園に行くと、ママ友がいて、みんな笑顔を振りまいている。私も、いつも公園では笑顔にしている。でも私は知っている。「きっとみんな家では子どもを叩いているはずだ。だって、あたしがそうだから。」と思っている。

「あやね」は、私がいつも笑っている公園が好きで、家に帰るのを嫌っている。「あやね」は、外では叱られないことを知っているから、好きなように振る舞っている。そんな娘の様子を見ながら、私の体の中の澱んだ水かさが増えていく。

家に帰って玄関の扉を閉じた時、がしゃんという音と共に、私の顔から最後に浮かべた笑顔がはがれ落ちる。

私は、子どもの頃、親から虐待を受けて育ち、手の甲にはたばこを押し付けられた傷跡が残っている。

「あやね」は、靴を履くとき右と左を間違える。その都度私は「あやね」の足をひっぱたく。そんなことの繰り返し。

ある時、近所の「はなちゃんママ」の家に「あやね」と行くことに。そこで、とうとう私は「あやね」を虐待していることが分かってしまう。「あやね」の投げたボールが私の手に当たり、私が立ち上がったただけなのに、それを見た「あやね」が、「ごめんなさい、ごめんなさい……」とけたたましく叫びだし、頭を両手でかばいながらその場にうずくまる。

その時でした。「はなちゃんママ」が私に抱きついて、こういいます。「虐待されたんでしょ？ わたしもだよ。だからわかる。つらかったよね。」

鈍いと思っていた「はなちゃんママ」は、鈍くなかった。「はなちゃんママ」は見ていた。「あやね」のふとももの指の跡、青い痣を。「あやね」が、私と手を繋がらないで、距離を開けて歩くことを。

以上が、「べっぴんさん」という作品のあらすじです。〈続く〉

(塾頭 吉田 洋一)